

第4回

武蔵野市立北町高齢者センターあり方懇談会

〈北町高齢者センターボランティアスタッフの皆様との意見交換会〉

会議要録

日時 令和4年12月16日（金）

場所 北町高齢者センター2階会議室

午後2時 開会

(委員、事務局自己紹介)

1 懇談会座長あいさつ

【座長】 懇談会は第4回目となり、これまで北町高齢者センターの今後のあり方について、懇談会の委員の皆様と一緒に色々な形で意見交換をさせていただいてきたところだが、普段北町高齢者センターでボランティアとしてご活躍いただいている皆様からもぜひ色々な意見を伺いたいということで、本日お時間をいただいた次第である。

1時間ほどであるが、緊張せず、普段思っていたらっしゃることや、やってよかったなどということ、北町高齢者センターでの思い出、今後も含めてこうなっていったらいいな、もっとこうしたほうがいいんじゃないかとか、そういったことを色々伺う会と思っている。忌憚のないご意見をいただけたらと思う。

2 意見交換会

テーマ(1) ボランティア活動の状況等について

【座長】 まず、自己紹介をいただきながら、現在の活動状況や、コロナの影響について思い出していただき、大変だったことや、その中でも工夫したこと、ボランティアとしてよかったこと、やりがいになっていること等を、お一言ずついただく形で進めていけたらと思うが、いかがだろうか。

【ボランティア①】 北町高齢者センターを山崎先生が思いつかれたときからお話を伺い、お手伝いをしていた。地域に密着したお年寄りの居場所をつくりたいという先生のご意思で、患者さんみんなに趣意書を回し、ボランティアを募った。そのときからのご縁である。

私はたまたま手芸が好きで、縫い物から編み物から、お人形をつくるとか、月がわりぐらいで色々なテーマを出して、お年寄りの方に作っていただいている。好評なものもあるし、あまり好評でなかったものもあるが、楽しんでいただけたかなと思っている。自立度が下がっている方もいらちゃって、一対一で、つきっきりでやらないと何もできないという場合も増えてきた。

そういう意味では、お年寄りの状態によって、手芸が難しくなる場合もあると思うが、半分お手伝いしていても、でき上がるとうれしい。家へ持って帰って「できた」と言うと、

「やっていただいたんでしょう」と言われつつも、「それでもうれしい」と。楽しんでいただけたら、よかったかなと思う。(拍手)

【ボランティア②】 私は初めからではなく、ここが始まってから1～2年後ぐらいからである。私の場合は引っ越してきたので、先生の患者ではなく、一小のそばに市役所の別館か何かがあって、そこにたまたま住所録や何かを届けに行ったときに、主人が、小冊子に載っていた先生のこういう会を開きたいという思いをたまたま見た。ご自分の土地を提供して、こういうところをつくりたいという、すばらしい人が武蔵野にはいる、ということがあった。それで私も、料理や手芸が好きだったので、近所の奥様方に「もしよかったらやってみない？」と。一小のPTAのお母様方のつながりでやらせていただいた。私は山崎倫子先生を知っていてやったのではないが、先生がお亡くなりになってからも、メモリアルルームというものを立ち上げて、どうしても先生のご遺志を残したいという皆さんと一緒にやらせていただいている。

コロナ禍になって、利用者さんと一対一でできないというのはすごくつらいが、自分たちでできる範囲を決め、できる範囲内でやらせてもらおうということでセンターと話し合いをしている。(拍手)

【ボランティア③】 私は水曜日の音楽班で、ボランティア講師とご一緒にご指導させていただきながら、皆さんと和気あいあいと歌を歌ったり、楽器を使ったり、楽しくやっていたが、コロナ禍でそれが一切なくなった。私たちボランティアも、2年近く皆さんと一緒に活動することができなかったが、ここ2～3カ月は、お声をかけていただき、ボランティアだけで少しでも声を出して元気付けようといった形でやらせていただいている。コロナがおさまったら、また昔みたいに和気あいあいと、皆さんと昔の歌を聞いて歌って、あのころこうだったねという会話ができたらいいなと思っている。(拍手)

【ボランティア④】 木曜日の美術班でボランティアをしているが、最初は調理のほうだった。山崎医院にはもともと受付で勤めていた。倫子先生がもともとすばらしい、すてきな方で、閉院になってしまっても倫子先生は元気にされているというので、調理からボランティアを始めた。そうしたら、こっちのプログラムでも何かどうですかと誘われて、粘土等の手作業が好きだったので、そちらのほうにした。最初のころは先生がいらして、絵手紙も粘土のほうもと。しかし、お亡くなりになり、ボランティア同士で色々考えて、次の作品はどれにしよう、あれにしようと言って、試作品をつくっていた。その名残で、

今またコロナになってできなくなってしまったときに、「何かお手伝いすることはありますか」とセンター職員に聞いたら、「それでは、絵手紙の見本みたいなものを書いて」と言われたので、今、週1で集まって、翌々月の作品をつくっている。

最近ホールに入れるようになったので、様子を見たら、やはりコロナで利用者さんたちの認知度が進んでいたりして寂しいと思う。一緒にしていたときはワイワイ、手取り足取りで、こうだね、ああだねという話をしていたときは皆さんお元気だったのに、こんなに進んじゃうんだなというのはつくづく感じた。(拍手)

【ボランティア⑤】 センターのボランティアになったのは、センターが始まってから2～3年後だと思う。山崎医院の患者でもあり、6歳ぐらいから先生たちに診ていただいていた。先生の晩年には「6歳からだよね」と言われて、私も6歳に戻れたらよかったなと思った。子どものときから親しかったお隣の方が先に患者さんでボランティア活動を始めていらして、すごく活躍されていた。その方から、「ためになるから、いらっしゃい」とお誘いを受けて始めた。最初、ボランティアで入っていらっしゃる方は、母の知り合いの方が多くて、センターに来たことで、それまですれ違っていたかもしれないけれど全然親しくなかった近所の方や、本当に大勢の方と知り合えるようになった。また、その方々が皆さんすてきで、こういう方たちがボランティアとして活動されていて、職員の方々も、こうしよう、ああしよう情熱的で、こういうところがあるなら、私は年をとっても怖くないなと思った。そのころはまだ30代だったと思う。時代が変わって、私たちは団塊の世代なので、人数が多いということもあるのですが、世の中も少しずつ変わってきているので、そのころのようにはいかないかもしれない。それでも、人というのは変わらないと思う。

いろいろな方々と活動を続けさせていただいて、センターのほうでも、私たちがコロナの中でもセンターとかかわれるようにしてくださったので、感謝をしている。ボランティアのほうも、つながっている絆を断たないような努力をしていると思う。今いらっしゃる方はみんな顔見知りというか、心から話せる仲間だなと思う。活動内容については、一緒にやっておりますボランティアの方々が話してくださったとおりである。(拍手)

【ボランティア⑥】 私は、高校のころからボランティアに興味があり、養護施設に行ったり、構内に花を飾ったり、JRC（日本赤十字社）の活動にかかわっていて、友人が倫子先生のところでボランティアを募集していると言うので、そのボランティアとしてかかわりたいなと思って来た。先生が地域のサロンとして開かれたということを知って、地

域に密着した施設なんだなということでボランティアをさせていただいた。

最初は厨房でやっていたが、お庭が殺風景で、ツツジの植え込みがあるだけだったので、友人と一緒に新しい庭にしようということで、先生にも許可を得て、庭の手入れをさせていただいている。コロナ禍でも屋外の活動は続けていいということで、続けられている。自分が年をとってくると、地域との密着ということがとても大事なことかなと思っているので、これからも続けていきたいと思っている。(拍手)

【ボランティア⑦】 最初、私の友達がここでボランティアをしていた。それで、かねてから一緒にやってよと言われていた。その方は女性の方。私は、ウイークデーは仕事があったので、「リタイアしたら」ということで、ここへ伺った。最初に伺ったときにまずびっくりしたのは、男性がいないということである。日本人はこんなに男性が少なかったかと思った。

私は、最初は水曜日、次の年から木曜日、2人で一緒にやっていた。水曜日は音楽のグループでお世話になって、そのときたった一人、ボランティアで男性がいた。しばらく仲よくやっていただいたが、残念ながら亡くなられた。それ以来、一人である。

ボランティアに関しては、私の頭の中では災害ボランティアしかなかった。そのため、この世界にお世話になり、こういうボランティアもあるのかと初めて知った。それに引かれて10年目になったが、10年目なんて全然（長くない）。この方たちは皆30年やっている。(ボランティアとしては)私が一番新しい。この方々のお話を伺えば、倫子先生がお始めになられたセンターの歴史がよくわかると思う。

もう一つ、30周年記念の記念誌を出したときに、何かお役に立てればと思って、お手伝いをした。そのときに、過去の記録をいろいろと拝見したら、こういうセンターがあったのかと初めて知った。これからは続く限りは、できる限りのことはしていこうと思う。

(拍手)

【ボランティア⑧】 私は、センターがこういう形になる前から倫子先生の患者で、相談を受けて、最初の立ち上げから全部かかわっている。「あなたは最初からだから残りなさい」と言われて、月曜日のプログラムといった立ち上げから全部にかかわってきた。有能なボランティアさんがたくさんいらっしゃるの、その方たちに、手芸はここ、絵はこちらと全部やっていただいて、私自身は金曜日の手芸にかかわっている。倫子先生に「あなたは全部やらなくちゃだめ」と言われて、最初からやってきた。

武蔵野市は、ほかの市町村に比べると有能なボランティアさんがたくさんいらっしゃる。

私は都心にいて、埼玉県にも 10 年ぐらいいたが、皆さん「有料だったら行くけれども、ボランティアは」と言う方が多い中で、武蔵野市はボランティアさんが本当によくなさる。それで、武蔵野市以外は全部やめて、金曜日に伺いお手伝いさせていただいている。（拍手）

【座長】 今日お越しいただいたボランティアの皆さんから一言ずつお話を伺ったところだが、委員の皆様からも、今伺った中で、もう少しご意見を聞きたいとか、追加のご質問があれば伺いたい。――よろしいだろうか。

テーマ（2）今後の北町高齢者センターのあり方について

【座長】 最初に、事務局から資料に基づいてご説明させていただき、その後、ご意見をいただきたいと思う。

【事務局】 まず始まる前に、この風景を見て、私は非常に懐かしいなと思っている。以前、このような車座で、ボランティアの皆様とお話をさせていただいたことを思い出した。旧山崎医院の1階で、メモリアルルームができた後に、それまでの経緯や倫子先生の思いといった、そういったことがわかるようなメモリアルボード（銘板）を皆様からつくりたいというご要望をいただき、それではどのようなものが良いのか、文章や大きさ、材質はどうするか、立てる位置も皆さんと一緒に話しさせていただいたのを懐かしく思い出した。私もそこを通るたびに、銘板ができて良かったと思っている。そのような感想を持ったので、お話しさせていただいた。

それでは、資料に沿ってご説明させていただきたいと思う。今回、ボランティアスタッフの皆様からご意見をいただくに当たり、これまで3回、委員会を開催した。その経過について、簡単にご説明させていただきたい。

資料1について。ボランティアの皆様にご改めてご説明するのも大変おこがましいと思うが、設立の経緯からお話しさせていただきたい。吉祥寺ロンロンのベンチで一日中座っている高齢者を見て、「何とかしたい、高齢者が気軽に来られるサロン、居場所を作りたい」という山崎倫子先生の思いと、「将来、自分の医院の土地に小さな老人ホームを建てたい」という浩先生の高齢者への思いから、昭和62年10月、日本初の単独型デイサービスと高齢者住宅が併設された施設として開設された。200名を超える多くのボランティアに支えられて運営してきたところである。平成27年5月、残念ながら倫子先生がご逝去され、ご夫妻の診療所兼自宅が市に遺贈された。平成29年10月、遺贈されたご夫妻の診療所兼

自宅を活用し、デイサービスを拡充するとともに、子育てひろば「みずきっこ」を新たに開設し、高齢者の皆様と乳幼児も含めた世代間交流が積極的に行われることとなった。

北町高齢者センターの現状と課題、まずは1階のデイサービスについて。

デイサービスは、定員は平日 25 名となっているが、給食調理の外部委託化による人件費の増加や介護保険の制度の変更により、収入等が厳しい状況で、収支的には経常的に赤字が続いているという状況である。

もう一つ、子育てひろば「みずきっこ」は、平成 29 年に開設し、現在は「サニーママ武蔵野」が運営している。多くの乳幼児の親子が来所していただき、世代間交流も盛んに行われ、皆様からご好評をいただいている。一日 10 組までとしているため入り切らない日もあったが、新型コロナの拡大が続き、現在は定員を制限している。

小規模サービスハウスである2階の部屋は現在、5 部屋中お一人のみのご入居で、ここ最近では急激に人数が減ってきている状況である。施設は 30 年が経過しているため、今後大規模改修が必要となってくる。そういったことから、新規の入居者については募集を停止している状況である。また、以前は管理人の方がいたが、現在は不在であり、そのかわり、北町高齢者センター全体の管理については、夜間は機械警備を導入している。入居者様の対応については、緊急通報サービスを導入し、携帯電話で 24 時間対応している。

引き続き、資料 2 について。こちらは主に第 1 回の懇談会で委員の中から出た意見をまとめたものだが、やはり北町高齢者センターが倫子先生の思いをつなげつつ、独自のやり方で進めることができればよいのではないかと。特色としてはボランティアさん、多世代交流など。倫子先生は「たのしむ」といったことを常におっしゃっていたということである。現状についても、満足している、大きく変える必要はないのではないかとのご意見や、ボランティアとしての活動を続けたい、ボランティアの支えによって続いてきた施設であるというご意見である。一方で、この建物はハード面の課題もある。利用者の中には、足腰が厳しくなってきたり、施設を利用しづらくなる等、バリアフリーの問題が大きくなっているというご意見をいただいている。

コミュニティサロンの重要性について。倫子先生のコミュニティケアサロンといったところで、こちらの施設は大きな理念を掲げていただいております、今後さらにおひとり暮らし等も増えてくるので、そのようなコミュニティのサロンのような機能、これを維持するのが大事ではないか、地域とのかかわりを持てるようなコミュニティスペースがあるといいのではないかとのご意見があった。

また、今後新たな機能として、これまで新型コロナウイルスやここまでの超高齢化はなかなか経験していないところであるため、何かあったら相談できるような機能が今後は必要になってくるのではないかとといったことや、若年性認知症の方の相談窓口や活動できる場所に活用できたらいいのではないかというご意見があった。また、みずきっこもあるので、高齢者の方だけでなく、子どもが増えていく社会も必要だということで、子育てに関する相談機能も一方で必要ではないかという意見があった。

続いて、資料3について。懇談会のご意見の中から、皆さんからいただいた意見を図に落とし込んだものである。建物と機能を一覧で示した形であるが、本館と旧山崎邸の1階でそれぞれデイサービスを行っている。本館に「小規模サービスハウス」とあるが、先ほど申し上げたとおり、今はお一人になっている。新規募集も停止している状況で、今後そのお一人の方もなくなった場合の想定をお話しさせていただくと、この2階をどのような形で活用していったらよいかということ、主にあり方懇談会でお話しさせていただいている。その中で出てきたのが、先ほど「新たな機能」と申し上げた、例えば認知症の関係。認知症の皆さんが相談できるような場所や、来やすいように認知症カフェと言われるもの、認知症のサポーター養成講座（認知症の方をサポートするような講座）もできたらいいのではないかというお声がある。

1階に厨房があるので、例えば土曜日はその厨房を活用して、食をキーワードとして、コミュニティ食堂みたいな機能もあるといいのではないかという意見が出ている。例えば、食を通じてお越しいただき、小・中学生の学習支援を、2階で行うだとか、子育て相談をしていただいたりだとか、そういったこともできるのではないかという意見をいただいている。「デイサービス 機能訓練」とあるが、今も個別機能訓練は、デイサービスに来ている方が、少人数で機能訓練、リハビリの関係をしていただいているので、そういった部屋としての活用ができるのではないかというご意見をいただいている。

あり方懇談会というと、北町高齢者センターはどうなるんだろうと思われるかもしれないが、大前提として、現状のデイサービス、みずきっこのコミュニティケアサロン機能は継続していこうというお話をいただいている。

2階が空いた場合、2階で平日実施する事業と、土曜日は1階も使用した事業をと、そのような事業を検討できるのではないか。こちらの2階については、様々な機能を考えた場合に、壁で仕切ってしまうよりは、パーティション、可動式で広さを変えられるといったところも考えたほうが良いのではないか。全体的に、曜日や時間をどうするのか、誰が

運営するのか、運営方法はといった具体的な検討が今後必要というご意見をいただいている。

このような形で、あり方懇談会の委員の皆様からご意見をいただいているところであるので、ボランティアの皆様からもあわせてご意見をいただければと思っている。

【座長】 細かなところをここで決めるわけではなく、今のご説明を聞いた中で率直に感じられたことや、ご質問や、地域のニーズを日頃感じられて、山崎先生の思いも踏まえながら、もっとこういうこともやれたらといった、普段お感じになられていることがもしあれば、伺いたいと思う。

【ボランティア①】 今すぐどういうふうにできるだろう、といったことはないように思う。続けていくうちに、だんだん方向が見えてくるのではないかと思う。今はコロナが気がかりで、活動があまり活発にできないため、慣らして行って、そのうちに何かできてくるんじゃないかなという気がしている。

【ボランティア②】 私が今感じているのは、コロナ禍でもみずきっこを利用する方が多いと思う。そうすると、老人から子どもまでの全てを通して考えないと、やっていけないということではないが、倫子先生も、老人だけというのではなくて、子どもから老人までということをおっしゃったことがある。やはり小さいお子さんを何組かしかできないというのは。お母様方が「あそこはいろいろな施設があるから、利用できればいいわね」と言うのを耳にしている。この建物自体が使いづらい建物になっているような気がする。メモリアルルームから出たところなど。お母様方が安心して子どもを預けられて、私たちと利用者さんとの接点生まれるような、そういう動線を考えると良いと思う。年寄り同士ですと、うつむきになりがちなのが、小さなお子さんがいらっしやると、顔が上がる。

ここはボランティアさんたちがお庭をすごくきれいにしてくださっている。コロナ禍が済んだら、活動ルームから外に出て、お庭にも出入りできるような、カフェスペースのような、要するにお母様方がほっとできるようなところを考えられたらいいなど。実は今、コロナで私たちも利用者さんと一对一の活動ができていない。

もう一つは、私は厨房で入ったが、先ほど土曜日の厨房の利用についてお話があった。今、私たちのほうでもお食事ができないお子さんがいる。ノートルダム寺院の後のことを考えて、お食事に手助けができたらいいのかな。ただ、今はボランティアがいない。団塊の世代の私たちが卒業すると、お母様方は忙しくて、ボランティアをしている時間がない。それだったら、小さい子を預けて、自分たちは仕事に行く。娘たちには、「お母さんたち

がボランティアできたのはそういう時代だったのよ」と言われる。そこも考えながらやっていかなければ難しい。今のお母さん方は大変だと思う。だから、一杯のコーヒーを一緒に飲みたいと思う。そういう余裕があったら、色々なことが浮かんでくるのではないかなと思う。

【ボランティア③】 2階の会議室でデイサービス機能訓練をやっているが、今はフレイルで利用者さんが以前に比べて機能が下がっている。センターも、色々な場所で色々行っているが、せっかくここに広い2階があるんだったら、本格的にリハビリできるものをつくったらどうかなと思っている。

【ボランティア④】 私も同じ意見である。これからはリハビリが主になるような介護施設が必要なんじゃないかなと思う。グループで何のプログラムを行う前に、自分の足で歩けることが大前提で、それを支援する。そちらのほうがかれからは大事になるのではないかなと思っているので、デイサービスの機能訓練を広げていく。

ここのつくりがとても難しくて、無駄なところがあると思う。ここをもっと活用できたら、みずきっこの方も人数を増やして利用できる。活動室も中途半端で、真ん中の部屋も何となく使い勝手が悪い。そういうのを少しずつうまく使えるようにしたらいい。広いことは広いが、いつも来ると、メモリアルルームを遠回りしながら見て、もう少し使い勝手がよければ、みずきっこももっと利用できるし、利用者さんとの接点ももっとできるのにと思いながら、ボランティアをしている。

【ボランティア⑤】 私は、おっしゃったことがすごくよくわかる。自分のことを考えても、歩けなくなったらつらいことである。しかし今はそれに特化したデイサービスがどんどんできていく。反対に、その機能だけに特化すると、いろいろな設備は要らない。機械を入れて、ある程度の広さがあって、食事等はまた別とか、入浴といった、全体を見る施設ではなくても成り立っていく。求められているのはそうだと思う。そういうところは男性の利用者さんが多いように思う。今、このセンターで男性が少ないのは、そこら辺のところもあるのかなと思う。機能訓練は今はできない。人間は体だけ元気でも、それこそコミュニケーションはすごく大事だと私は思う。体が動かなくなっても、人と人とのコミュニケーションがあれば、生きていけると思う。機能訓練をやるに当たっても、仲間がいて、人と人との輪を結んでいくような存在の人物は必要だと思う。

建物のことに関しては、2階でも、こちらの建物と先生のお住まいと、つなげられるところがあると聞いたことがある。大規模に改築ができるのであれば、つなげていくことも

できるだろうし、可能性はあると思う。あるいは今、お部屋が区切られているが、よそで聞いた話では、マージャン等がありますよと言うと、男性は結構見えるらしい。そうしたことも、比較的要介護度の低い方はできると思う。

【座長】 色々な場所の機能差別化をどうするのかという点や、動線の部分、構造上のことや、男性の方のニーズをこちらでどうやっていくのかといった話だと思う。

【ボランティア⑤】 (建物)は小さいといえば小さいので、その特徴を生かす方法もあるんじゃないかなと思う。

【ボランティア⑥】 私も似た意見だが、資料を見ると、認知症についての取組が多い。私は逆に、予防のための施設が必要かなと思う。倫子先生が最初におっしゃったように、ちょっと通りがかりにお茶を飲んでいこうかなという程度のサロンができれば、予防につながるのではないかな。そこでコミュニケーションをとったり、地域の方とつながりができると思う。お金にはならないかもしれないが、予防という面では、元気な方が気軽に立ち寄れるような場所は大切ではないかなと思う。お家に一人でいらっしゃるよりは、ちょっと歩いていけるところというのが必要かなと思う。

難しいかもしれないが、ほかのところでは認知症や、今おっしゃったように施設で色々やっていたら、そういう見方も大事かなと思う。それは倫子先生の最初のご希望だったと思うので、それに沿っていけば良いのではと思う。

【座長】 認知症でも全ての人が生活できなくなるというわけではなくて、少し不自由を感じながら地域で暮らせる方がふらっと来れたりするというのは、認知症の進行の予防にもなるかもしれない。

【ボランティア⑥】 なる前の段階も必要だと思う。認知症になる前の、まだ元気なうちに、歩けるうちに来られるところ。

【ボランティア⑤】 決めつけてはいけないと思う。要介護度で、こうなったからこれはできないというのはないと思う。一人一人全部違うはずである。そういう対応ができるセンターであってほしいと思う。

【ボランティア⑦】 私は午前中はいきいきサロンをやっていた。皆さんご存じだと思うが、実はそのいきいきサロンは、こういう高齢者センターと共通点がたくさんある。ほとんど同じようなものである。例えば利用者さんの年代。平均年齢は、こちらのほうが少し高い。だから、よくわかることがある。例えば、どなたかが、みずきっことの交流、子どもさんとの交流とおっしゃった。うちでもそういう多世代交流を行っている。そうする

と、お年寄りの方たちの目の色が違う。子どもたちも中に入って、一緒に作業すると、みずきっこさんのお子さんは小さいが、もう少し上の年齢になって、要するに小学校の低学年ぐらいのお子さん、ここの利用者のふれあいは大事だと思う。そういう場所がしっかりあって、今ももちろんこちらでも交流していらっしゃって、成功されていると思うが、それをもっと確立していくのが一つ。

あとは、場所だけではなくて、人的な問題がある。30年間ボランティアをやってきたが、今私が見ていると、とても危惧を感じる。後から入ってくる人がいない。それを今いる我々がどうやって開発していくか。さっき言われたように、男性が少ない。そうすると、ああいう小さいところで囲碁とか将棋とかマージャンとか、お年寄りができるようなのが出れば、男の人がある程度入ってくるかもしれない。それが小さな拠点になって増えていく。そういう場所が欲しいと思う。

それから、後継者というか、こういうものをどんどん後に継いでいく、そういう流れを考えなくてはいけないと思う。物的なものではなくて、人間的なものであるが。私は皆さんと比べてここは新しいので、どこに誰が住んでいるとか隅々まではわからないため、こちらのほうはわからないが、それが利用できれば良いと思う。建てかえるわけではないため。そんなことを考えている。

【ボランティア⑧】 私は最初の立ち上げから色々話してきたが、当初はこの前に幼稚園があって、お子さんたちもいる。ここを老人だけのホームではなくて、すごく労力と精神力が要ることだが、交流を持ったことがある。そうしたら、幼稚園の子も「おばあちゃん、すごく楽しかったよ」とか、こっちのおばあちゃんは「久しぶりに孫たちと遊んだりして、よかったわ」というときがあった。

人は子どもから大人まで全部いるわけだから、別々のところに住むのではなく、手がかかるからだめというのではなくて、どこかで交流する。おばあちゃんが「公園に出ていなかったけど、小さな子がやってくれて、本当にうれしかったのよ」とおっしゃるときもあった。人として、子どもから年寄りになるまでの間を区切ってしまわない、そういうかわりが持てるようないき方もいいかなと思う。

【ボランティア②】 私たち手芸班は一对一でやっているのですが、コロナでだめになってしまった。これを絶やしてはいけないと思うので、センターにお願いして、第1と第3金曜日、活動ルームが空く時間に借りて、私たちもきちんとコロナの対策をして、最初は4人ぐらいで集まった。そこから徐々に集まって、第1と第3金曜を仕事会という形でやら

せていただいている。何も手芸班だけではなくて、活動ルームをボランティアさんの集まりの場、色々な方が出入りできる、そういう形に持っていければ、私たちも、人が少なくても、第1と第3のセンターが貸してくださる間はやりましょうと。自分たちの手仕事、できることをやればいい。手芸ではなくても、話し合いだけでも、年をとってきたら、そういう場だけでもあれば良いと思う。

今はできないが、お茶でも一杯飲みながら、我々元気な年寄りが居場所に集まりながら、自分たちのできる手仕事でも何でも、センターでお手伝いをする。先ほどおっしゃったように、ボランティアとして、自分たちのできる範囲のことでやらせていただいたらいい。第1と第3だけは、活動ルームを借りてやっていきたいなと思っている。そういう形でつなげていけたらと。

皆さんおっしゃったように、壁が多い。お金はかかるかもしれないが、うまく利用して、建物も心も壁の少ない、倫子先生のおっしゃった「風通しのいい」ものにできたらいいなと思う。

【ボランティア⑧】 やっている人だけのグループの塊ではなくて、つながりができるような。私たちより若い人たちの場といった雰囲気がないと。言い方が悪いかもしれないが、ボランティアをやっていて、自分が満足しているのではなくて、若い人につながっていくような、そういうつながりのボランティアがあるといいかなと思っている。

【ボランティア⑤】 コロナも、すこし落ち着いたときがあった。そのときに、センターの方でコーディネートして、みずきっこのお母さんとボランティアと一緒に、「今こういうことをやっているんですけど、一緒にやりませんか」と言って、手芸など何かを作ったりして、お母さんたちが来てくださった。そういうことから、望むべくは将来、そのお母さんたちが少しだけでもボランティアしてくれたらうれしいなと思う。

【座長】 本当にそう私も思う。

【ボランティア②】 みずきっこのお母様方が、「何年か後に自分の子どもの手が離れたときに、お手伝いしたいわ」と。

【座長】 そして、その子どもたちがまた。

【ボランティア②】 お母様方がちょっとほっとしたときに、あそこでボランティアをやってみようかしらとなれば、プレートにある、私たちは武蔵野市のボランティアとして全国で初めてのことをやるという倫子先生の精神、そこに戻っていくかなという気がする。

【ボランティア⑤】 私たちがやってきたようなボランティア活動というのは、先程も

おっしゃっていたように、お母さんたちには無理かもしれないが、気持ちはつながっていただくろうし、自分たちができることをやっていただければいいわけで、私自身の経験でも、センターの中で高齢者の方を知ることができた。それが今度は自分の親や祖母の介護のときに助かったというか、相談するところにもハードル低く伺うことができた。

今はまだ若いお母さんたちも、おそらく今だと核家族だったりするので、高齢の方を、頭でわかるのではなく、自分たちが思っているよりも精神的には若いかもしれないということを感じてもらえるのではないかなと思う。

【ボランティア⑦】 北町高齢者センターではなく、名前を変えたらどうだろうか。これだと高齢者だけである。高齢者〇〇ではなくて、市民センターとか色々ある。高齢者だけじゃないぞとアピールすればいいと思う。

【座長】 色々斬新なご意見が伺えて良かったと思う。委員の皆様から今のところ何かご意見があれば。

【委員】 ご質問というわけではないが、社会福祉協議会にはボランティアセンターもあり、そういった意味ではボランティアさんと日ごろ接している。今お話を伺いながら、若い方がいないというのは共通の課題だなと思った。

あわせて武蔵野市の事業で、シニア支え合いポイント事業というのがあり、平成 28 年から始まった事業だが、高齢の方が施設でボランティア活動をすると、そこにポイントを付与して、たまったポイントに応じていろいろなものに還元できる。やってくださっている方は、新規で入ってくる方というよりも、今までボランティア活動をやられていた方がサポーターとして活動されている方が多い。市内の幾つか施設を見ていったときに、北町高齢者センターで登録して活動してくださっている方が圧倒的に多い。今日お話を伺って、長年の皆さんの活動ですとか現在もそれが続いているというところを改めて感じさせていただいている。かつ、このコロナ禍でいろいろな工夫、努力を重ねて続けていらっしゃるということに、まずはお疲れさまでしたということを一言申し上げさせていただきたいと思う。

私どもで色々考えたことを市（事務局）が資料にまとめてくださったが、皆さんの意見をお伺いして、そんなに外してもいなかったのかなということを感じたところである。その他についても、皆様からいろいろご意見を頂戴したので、それを踏まえて今後また検討させていただければと思う。皆様にお礼申し上げたいと思う。

【委員】 私は北町高齢者センターの職員として、4月の異動で参った。ボランティア

さんが活動されているというのは伺っていたが、実際に生で利用者さんの表情やホールでの皆さんの活動、陰ひなたとなって、手芸班の方も、クリスマスツリーといった大作をつくれる。今回はクリスマスプレゼントもつくっていただいています、ああいう技術的なものもそうだが、熱い思いやエネルギーはすごいことだなと感心している。

一時、活動ができなくなって、再開はされているが、職員も皆さんにおいでいただくことをお待ちしているので、今後とも引き続き北町を支えていただければありがたいと思っている。

【委員】 私も予想どおりのボランティアさんのお話だなと思って聞いていた。やはり今までのものを生かしていくというのが一番大切だと思うし、それを生かして、また新しい、若い人たちを増やしていくたくさんアイデアをいただいた。みずきっこを十分に生かして、多世代交流をしっかりと考えていくことや、地域にお庭を開放して、多世代交流のコミュニティサロンとして、地域の方・お子さん・障害を持っている方・高齢者、皆さん分け隔てなく利用できる形に持っていくのが理想だということも今日のお話からわかった。私もここでボランティアとして少しかかわっているため、皆さんのお話をうれしく伺った。

【委員】 私のかわりに言ってくださっているなと思って感謝している。私も同じ気持ちである。人と人とのつながり、コミュニケーションというのは、認知症の予防にもなるし、楽しいという思いで、精神的な安らぎにもなる。皆さんが色々なご意見をおっしゃったのが全て現実になるといいなと思っている。

【委員】 私も、福祉公社に着任したのがこの4月であり、数えると9カ月ほどのため、まだまだ不勉強な部分が多いかと思うが、今お話を聞かせていただいたことがとても参考になるなという気持ちである。もう一つ、今までの、大事なことや忘れてはいけないことが多くあると思うが、これからどうするかを考えていくのも我々の役割かなと思っている。これからもお力をかしていただければぜひともお願いしたいと思っている。

【事務局】 本日欠席の委員からコメントを預かっているので、ご紹介だけさせていただきます。これまでの懇談会を通しまして、ボランティアの方たちにアイデンティティーといえますか、そういったものを強く感じているところでございます。ただ、北町に限らないんですけれども、ボランティアの方の次の方というような後継者といえますか、そのところが課題ですね。参加しやすい仕組みとかそういったものが何かあればということで、そういったところも検討できるのではないかと、というコメントをいただいているところである。皆様方からの話の中で、そういったヒントもたくさんいただいたかと思ってい

る次第であるが、ご紹介させていただいた。

【委員】 先ほどお話があったが、武蔵野市には志の高いボランティアの方がたくさんいらっしゃるというお話をいただいて、まさに北町を支えていただいている皆さま方が、その第一線だと思っている。また、地域に目を向ければ、先ほどのいきいきサロンや、テンミリオンハウス、レモンキャブなど、これらはボランティアの方に支えていただいている、武蔵野市が全国に自慢できる施策、事業だと思っている。改めて武蔵野市民のボランティア精神の高さに感銘を受けている。

ただし、そのボランティアをどうつないでいくかというのは、先ほど来お話があって、非常に大きな課題だと思っている。従来から地域福祉やボランティアはいわゆる主婦の皆さんに支えられて続いてきたが、先ほどお話があったとおり、女性の社会進出が進んで、地域にいる時間も限られている中で次の担い手がなかなか見出せない。これは非常に大きな課題だと思っている。先ほどお話があった、みずきっこのお母様をこちら側に引き込むようなことも非常に面白いアイデアだし、男性のボランティアを引き込むにはマージャンなどの男性にとって興味のあるプログラムを加えていくのも一つの大きなアイデアだ。

いずれにしても、北町高齢者センターについては、山崎倫子先生が思い描いていらした形をつくるのに、ボランティアさんの力がなくては語れないと思っている。これが単なる民間でやっているデイサービスセンターと同じことでは全く意味がない話なので、そこをどうつないでいくのかというのは非常に大きな課題で、今日皆様からいただいたご意見は大変貴重だと思っている。それをどうつないでいくか。それはまた改めて懇談会の中で大きく議論してみたい。

3 その他

【座長】 それでは、そろそろ時間のため、これで懇談会を終了とさせていただきます。

先ほども委員からあったように、山崎先生の存在の大きさが改めて伝わってくる皆様のお話であった。その思いを次にどうつないでいくのか。それをもっと時代に合わせた形でより発展させていくことも大事だということを思った次第である。引き続きご協力とご理解をお願いしたい。

【ボランティア①】 最後に一つ、外から見てここは閉ざされている。中で何をやっているか皆さんご存じない。近所の方もご存じではない。どこか一部屋、外からのぞけるところをつくって、喫茶部のような、誰でも入れる場所を一カ所つくったらどうかなと思う。

【ボランティア⑦】 その点、はなみずき祭りは台風とコロナでここ3年間やっていない。そのときは地域の人たちが来るため、なくなったのは大きいと思う。

【ボランティア①】 何かというとコロナになってしまうため、オープンにする場所をできるだけたくさんつくったら良いかなと思う。

【座長】 物理的にもというお話であるが、最後に貴重なご意見をいただき有難く思う。

午後3時20分 閉会